

火
渦

神田の印刷所の二階は色々の紙が堆うすたかく積んであって、その紙の山の狭い間に事務机が置いてあった。要作は或る広告ビラの校正を終えて飯を食いに下りようとして立ち上った。その時この大地震が来た。十一時五十八分である。印刷所は古い木造建築物だったので、たちまち物凄い音を立てて階下を押しつぶして倒れた。轟々ごうごうという辺りの響きと土煙の中で、要作はどういう風にして表の道へ這い出し、どういう恰好かっこうで地震のおさまるのを待っていたか、少しも覚えがなかった。

おさまって、辺りには人々が叫喚きょうかんし始めたが、押しつぶされた階下にいた筈の主人夫婦と職工の三人はうんともすんとも言わなかった。要作は飛び起きて倒れた印刷所の傍から裏手へ廻って、主人や同僚の名を呼んで見たが誰一人返事をする者がなかった。近くの倒れた家から火事が起った。消そうとしている者もあつたが、大部分の人々は一層慌てふためいて逃げる仕度をし始めた。次いでゆり返しが来ると消そうとしていた者達も恐怖にすくんでしまった。そのうちに火事は燃え放題になった。人々はただ色を失って持てるだけの物を持って、逃げる慾だけには最後の踏ん張りを見せた。要作も主人や同僚の死は放り出したようにして、身一つでよろけながら駆け出した。

要作は本所の自宅のお峯や浩二のことがしきりに気にかかり、地震が静まると電車通りをひた走りに走った。大通りを右へ曲がってやつと両国橋まで来ると、本所の方では火事が一面に起きていて、橋はこちらへ避難する荷車や人々でようやく混雑して来たところであつた。

要作は両国橋を渡ると再び走り出した。行く手は右にも左にも煙が立ち上っていて、その煙の風下は黒い幕を垂れたように暗くなっていた。避難者はますますふえて来た。彼等

は十人が十人まで、多いものは荷車で堆く、少ないものでも何かしら荷物を抱えていない者はないと言っていくらいであった。黒い幕の下から電車通りに一杯になって彼等は押しよせるようにひしめいて逃げて来た。要作はその流れとは逆に人々を押し分けながら行ったが、だんだん進めなくなって来た。しばらくすると辺りがすうと暗くなった。右手の火事の煙が何時の間にか黒い渦を巻いて頭上を越えていた。要作もこの不気味な薄暗さにおびえ、人々の喧噪けんそうに駆り立てられて、ここまで夢中になって駆けて来た気持ちも挫けて、人々にぶつつかって押し返えされた。そして次第に人々と一緒になって、来た道を逆に引き返えした。

「被服廠へ行け！ 被服廠だ！」

と言う叫び声で、人々の群は雪崩を打って大通りを右へ曲がって流れた。

人々は風に木の葉が吹き寄せられるように被服廠の入口へ集まり吸い込まれた。広場へはいると不意に涼しくなった。人々は口々に安堵あんどの声を上げた。火は広場に沿った電車道を一側残して遙かむこうを北へ焼け抜けていて、こちらへ向かって来る模様はなかった。

広場は地震で水道管が破裂したので所々に泥水が吹き上り、その水は低いところを流れて真中の小さい池へ向った。人々はこの水をばちやばちはね返しながら駆け込んで思い思いに乾いた空地を見つけて荷物をおいた。

要作も鉄管の積んである上へ腰を下してホツとした。それと共に左足の裏がにわかにかき刺すように痛くなつて来たので慌てて水の中から上げた。彼は靴をはいていなかったことにはじめて気がついた。靴下は殆ど破れてしまつて、足の裏に血が出ていた。彼は顔をしかめて、ポケットからハンカチを出して破いて、無器用な手つきでしばった。

法被はつびを着た男が黒い葛籠つづらを一つ軽々と背負って来て、要作の傍の鉄管の上へ下ろした。水の中へ立って腹掛の井から煙草とマッチを出して口にくわえた。

「ここまで来りやア」と誰にともなく言ってから要作を見た。「大分人がやって来ますねえ。どうです」

要作は顔をしかめたまま頷いた。職人らしい男は吞気そうに煙草をふかして辺りを見廻わした。

「やあ、来る来る。何だ。お巡りと喧嘩してやがる。そうだな。もう荷物を入れるなア制限した方がよさそうだ」

と彼は勝手な解釈をした。間もなく後の方で女の鋭い息切れと話声がした。

「さあ、お母さん、この上でいいでしょ」

十七、八の若い娘と母親が鉄管の上に背負って来た荷物を下した。それに続いて布団を抱えた中婆や子供を背負った女達が四、五人、先を争うようにしてこの鉄管の上の席をとった。僅かに残った右の方の端には父子四人の一家が車をひいてやって来て、車をそこへ寄せて陣取った。

鉄管を積んだこの場所がたちまちこういう人々で占領されてしまったので職人は呆氣あっけにとられたような顔付と面白そうな顔付とを相互にして眺めていた。

「母さん」娘は低い声で言った。「妾わたし、あの帶止、忘れて来ちゃったわ」

「そう」

「そう、って……惜しいわ」

「何言ってるんだい。それどころじゃないよ。さあこれをお上り。」

母娘は何か食べるらしかった。この食べる音はたちまち辺りに伝染した。

世帯持は流石に飯櫃めしひつだけは必ず抱えていた。車をひいて来た父子は茶碗箸まで揃えていて、平常と変わらぬ音を立てて飯を食った。

「××ピス。××ピス。××甘酒」

カンカン帽に半纏はんてんをきた男が袋を肩にして瓶詰の飲物を売りに来た。この思い付きの板についたところは露店商人か何かだろう。鉄管の上の避難者にもたちまちこの瓶詰が数本売れた。人々は鉄管の下に汚れない水道の水の噴きだしているところを見付けて、これで飲み物に水を割って飲んだ。要作はポケットを探ったが生憎あいく財布がなかった。何処かで落して来たらしい。職人も買えなかったらしい。思わず人々の飲んだり食ったりするのを眺めていたが、自分でもそれに気がついて気恥しくなったと見えて、煙草を斜に吐きながら空を仰いだ。

「凄く燃えやあがる」

天には黒い煙が覆いかぶさって、陽は赤く勢いを失ったように懸っていた。電車通りはずっと向うにある高いコンクリート建物が燃えていた。下の方からの炎と暗い一面の煙の中でこの建物はしばらくの間は焦げくすぶるようには見えだが、高いところにある窓の一つが突然開くと、そこから眼を射るように眩しい白色の炎が激しい勢いで吹出した。見ていた職人は感に堪えたような嬉しそうな声を上げた。

「綺麗だわ！」と後方の娘が思わず口走った。

「これ！」と母親はたしなめた。続いて叱りついでのように尖った声で、「膝をお直しなさいよ。何です。その恰好は」

要作は前方の自転車を押して来る小僧の後方で、裾をまくって水の中へはいる仕度をして、いる女の姿に眼をとめた。お峯ではないかと思つたが人違いだった。しかしそれと同時に、お峯がこの広場に来て居るかも知れないと思つた。要作は痛い足を思い切つて水に入れてそこを立つた。この空いた席は要作の歩いて行くのを見送つていた職人が代つて腰を下した。

歩き出すとはじめは飛び上るように痛かつた左足がだんだん麻痺して来た。要作は人々と荷物の間をかき分けるようにしてあちこち歩き廻つた。見渡す限りの何万人という人とその荷物であつた。要作は注意深く、子供連れは勿論独りで居る女の顔までのぞき込むようにして廻つた。酔つてゐる声が聞えた。

「何言つてやがんでえ。火事に地震はつきものじゃあねえか。日本の国によ、鯰の髭がピンと来りやあグラグラツと来らあ。火事あ江戸の華だあ。何言つてやあがる」

植木屋風の酔つ払いは前を通ろうとする要作にからみつきそうであつた。周囲の人々は物を食つたり荷物に肱をついたりしながら、面白そうにこの酔つ払いを眺めていた。

「金蔵やあーい」

一人の老婆が震え声で呼ばわりながらやつて来た。傍の荷物の上に跨がつて二人の若い男が将棋をさしていたが、一人がこの声を聞くと吃驚して立ち上がった。老婆は若い男の顔をチラリと見たが、愛想もなく顔をそむけて、尚もキョロキョロしながら行つてしまつた。若い男は、

「何でえ、吃驚さしやがる。人の名を呼びやあがつて」

とまた向き返つてそのまま将棋盤に向かつた。子供連れの女は沢山いたが、お峯は見え

なかった。安田邸の右にある、バラックの建物の屋根の上では、二十人ばかりの男が坐ったり立ったりしながら遠くの火事を見ていた。端に居る髭の生えた背の高い男は何かもぐもぐ食いながら、手をかざし、眼をかがやかせてしきりに眺めていた。一人の男が下から心配そうにきいた。

「どうだい。火事は」

髭の男は眼をぐりぐりさせて、

「凄えぞお」

と言った。下で訊いた男は苦笑してそこを離れた。

入口からは人々が後から後からとひっきりなしに入って来た。広場は水の浸っている処さえだんだん余地がなくなって行った。所狭くしたのは勿論人々の持ち込んで来る大荷物だった。人々はもう乾いている地面が塞がってしまったので折角大事そうに運んで来た綺麗な夜具や小箆こたんすの様なものを泥水の中に浸して置かなければならなくなって来た。

要作はもとのところへもどって来た。さっき居た所には二人の若い女が呆然として腰掛けていた。同じように抜け上がった額をしているところから二人は姉妹だろう。職人は自分の持つて来た葛籠くわろうをさらく水の上に下して、それへ腰掛けていた。要作の顔を見ると、縦にしていた葛籠を横にしてこんなものはもうどうでもいいんだという気前を見せながら、

「さあ、どうぞ」

と親切にすすめた。

「足を怪我してるんですか。え？裸足じゃあ非道ひどいや。どこから？神田から？そりやあ大変だ」

要作は口をききたくなかったが仕方なく応答した。

「何うです、この人あ」職人はさつきと同じような感歎を続けた。「随分詰まったねえ。これじゃあ十万はあるね。ええ？一寸人が集まるってやあこれだからね。東京も人が多いやね。多過ぎるよ」

続々と来る人々は入口の警官の制止もきかず、死物狂いで入口を押し入り、はいってしまふとけろりとして今入口でどんな押し合いをしたかを忘れてしまったような顔付になった。要作は遠くからそういう利己的な顔付であとからあとからと跳ね込むように入ってくる人々の顔を眺めた。お峯がそんな中に混じって入って来るかも知れないという望みをぼんやり抱いていた。

急に辺りが夕方のように暗くなって、雨がポツリポツリと降って来た。職人は空を見上げた。

「や、雨だぜ。有難い。これでザーと来りやあ、この火事も、落着くだろうよ」

荷車をよせていた父子も手を出して空をうかがった。その父親は息子達に荷物をまかせておいて何処かへ人を分けて出て行った。間もなく戸板と筵むしろを二、三枚持って来た。それを荷物の上へかけるのを見て職人は雨が降ればこの広場の荷物がみんな濡れてしまうんだなということをはじめて気がついたようであった。

それから一寸の間、職人が白けたように口をつぐんでいた時、思い掛けなく辺りの人々が騒ぎを一時静めて、不意に辺りに息づまるような沈黙がみなぎった。沈黙は広場一杯になつて、人々の雑然とした動きが一瞬不思議な程ひたと止んだ。こういう予感は一切何と言ったらいのだろう。その時、何万という人々の心は大きな一つの生き物の神経となつ

て、何か不吉なものの襲い来るのに耳をすましているかのようであった。

突然西南の安田邸の向うの方でモーツと云う異様な音響がした。その空に急に真っ黒な雲のような柱が空高く立ち現れ、柱は斜めに太くよじれて急旋しながら見上げるような大きな龍巻きの芯となり、百千の滝を一度に轟かす様な凄じい轟きで天地を押しながら広場の上に迫って来た。広場に一杯になっていた数万の人々は之を見ると総立ちになり、数万の口が一斉に恐ろしい叫び声を上げた。

一体これは叫び声だったろうか。恐怖に押し殺された数万の魂が抜け出る断末魔の音ではなかったろうか。それに応えるように龍巻はたちまち広場へ襲いかかると広場全体を大きな風の渦の中に巻き込んで、場内にあつた建築中の家を押しつぶし足場の丸太や板などを虚空に巻き上げ、トタン板や人々の引き込んだ荷車、自転車、郵便車、荷物、或は立木などを吸い上げ、それらが暗い空に翻轉はんにんする間には幾百と知れない人々の姿が豆を投げ上げるように入り混った。

要作は葛籠の上から五、六間先にある水の上に投げ出された。重そうな長持があつたのでそれにとりついて、ともすればすぐわれそうになる体を必死になつて支えた。

風が一時、腰が折れたような瞬間があつた。と思うと火の子が一面に降って来た。再び風が強くなると薄い煙の大きな渦がたちまち火の渦となり広場を中心にして物凄い火の柱を空高く立てた。

要作は這って鉄管の傍より水道の水の吹き出しているところへ体をつけて、体半分を水にひたるようにした。廻りでは、舞い上がらなかつた荷物は勿論、着ている着物にまで火がつき出した。鉄管置場の向う側にあつた荷車に火がついて荷物をのせたまま空へ浮いて

行った。そして遙か向こうの大通の電柱の上に落ち、乗ったまま燃えた。要作の目の前のところで荷物をかかえていた女の背中へ火のついた座布団が紙のように貼りついて動かなかった。女がこの布団をとろうとして手を動かした途端に女の体は宙に浮き、髪と着物に火がついて轟々という激しい音の中に際立った鋭い悲鳴を残しながら、空の火の渦の中へ吸い込まれて行った。要作の伸ばした足の上へ誰か落ちて来た。彼はその痛さに思わず立上がりかけると、落ちた男はその背中にとりついて、要作の耳許で猿の悲鳴のような鋭い叫び声を上げてやがて手を離して倒れた。要作のいるところは風の陰になっていたために、それから引き続いて幾人かの人が走り込んだ。しかし大部分は要作の上に倒れかかって唸り声を上げながら動かなくなってしまう。動かなくなった人間の着物に火がついて燃えた。要作は夢中になって体や頭に水をかけた。

旋風が通り過ぎるとやや静かになった。しかし荷物はもう一面の火であった。要作は彼に折重なっている人間をはねのけて跳り出すと、目当てにしていた三、四尺前にある水びたしになった布団を体に巻きつけて、荷物の火の切れている合間から駆け出した。

人の体を滅茶苦茶に踏みながら広場の中頃に出た頃、また旋風がやって来た。風の激しく流れる音がピューピューと鳴り出して、要作は無意識のうちに死に物狂いで傍らの人間の積み重なった中へもぐり込んだ。旋風はまだ長い間吹きまくった。もうさっきのような轟きはなくただ風が激しく渦を巻き火の炎を吸い込んで広場の上に大きな火の炎の筒を立てるだけであった。要作は奥へ奥へと頭を突込んで人間の間を掘って行くうちに、箆筒のようなものと人の間にはいり込んだ。下にはやはり水があった。上には要作が背負ったようにして人が積み重なっていた。要作は下の水を手ですくっては体や手のとどく限りのと

ころにかけた。人の叫び声は一つも聞えなかった。火の燃えるのと風の唸る声がそれから永い間虚空に鳴り響いていた。

要作は堪え難い熱さに気が遠くなった。膝をついていた足を伸ばして下の水に落ち込んだ。背中になっていた人間は石のように落ちた。

三度目の龍巻が襲ってきた。最初の龍巻の恐ろしい轟きにつぶれた耳では、これはまるで音もなく炎の渦が大きく廻っているようなものであった。

何十分たったか、要作は息苦しくなって気がついた。彼は口の下の泥水を大分飲んだようであった。再び飲もうとして気がついたのであった。もう風の音は止んで熱さもそれほどではなかった。彼はすっかり意識をもどして背中を重く押している人間が何であるか気がついた。膝に力を入れて体を起してこの中から抜け出ると、人間は要作の代りに荷物のように中へ落ち込んだ。斜めになったのを見るとそれは完全な死体であった。四肢を踏ん張れるだけ張って、片側の着物はすっかり焼けて失くなって、ただ広い女帯だけが黒く焼け残っていた。髪はすっかり焼けて真黒い顔に舌だけが口一杯に長く出ている。辺りにはまだ盛んに燃えている荷物があつた。彼は辺りを見廻しさっきの布団を拾いとるとこれをまとつて、ここを抜け出した。煙にむせびながら火のない方へぬけて行くと、荷物の燃え殻の間にあるものは眼につく限り死体であった。

広場の北の安田邸によつた溝の傍には二、三百人の生き残つた人々が塊まっていた。もう荷物を持った者などは一人もなく顔も体も真黒になつて、着物も満足なものではなかった。広場の北にあつた本所郵便局はもう殆ど燃えてしまい電車通りが燃えていた。辺り一面に煙がただよい、生残つた人々はこの煙の中で知つた者同志相抱いて、必死の唖れた声で

んで念仏や題目を唱えていた。煙の合間に西の空に真赤な生氣のない太陽がかかっているのが見えて、まだ日の暮れていないことが判った。

要作はここに近づく^と立って歩いているのか這っているのか判らなくなってそこへ来て倒れてしまった。彼の足の下には一つの死体の腕があつたが、彼はもうそんなことには麻痺してしまつた。安全地帯に辿りついたのを確めただけで精一杯であつた。

近くにいた黒い女達が抱き合つたまま歓声を上げた。要作が顔を上げると、南の方の市電の建物が火の子を立てて焼け落ちるところであつた。電車通りの方の火は殆どおさまつていた。辺りは急に暗くなつた。そのの二三百人は生き残つた喜びの鬨の声をあげた。若い男達は手を挙げて万歳と叫んだ。

一時間経つと、近くの町の火も消え広場の中の煙もおさまつた。ただ大川の向うに当る浅草の方では空を真赤にして、その方から夥^{おびただ}しい煙が舞つて来た。辺りが静かになると暗い広場の死体の間から様々な声が聞えて来た。唸る声や喉にからまつたぜいぜい言う声、遠い所では助けを呼ぶ声や甲^{かんだ}高い泣き声や、水を求める声、誰かの名前を呼ぶ声などが入り交つて異様などよめきとなつた。死体なのか荷物^の焼け残りか判らない暗い累々とした堆積の上を黒い影が這うように歩き廻つた。一つの影がすつと立って女の声で叫んだ。

「逃げるんじゃないよ。逃げるんじゃないよ」

それからこの影は男のような笑い声を立てて暗い中へ倒れた。するとまるでそれにつられたようにその近くから痛みを訴える声が蛙の鳴き声のように沸き上がった。突然、要作の足の下になつていた手が彼の足を恐ろしい力で掴んだ。要作は髪の毛を逆立てて跳ね起るとこの腕を叩いた。この生きているのか死んでいるのか判らない男は要作の足にとりつ

いて半ば起き上ろうとしているようであった。要作は拳骨でこの男の顔を滅茶滅茶に殴った。男は唸りもしないで腕を曲げたまま要作の足を掴んでいた。要作はその掴んだ指を無理に引っ張って開けた。指は骨のわれる様な音を立てて離れた。要作は飛び上った。五、六間必死になって駆けると空いたところへ倒れた。後ろをうかがうと追ってくる様子はなかった。彼は大地に肱をついて大きく喘いだ。心臓が胸の壁を破るかと思うほど叩いた。冷汗は水をかぶったように流れた。

要作はこの地獄を逃げ出した。北の出口には死体が一杯あって足の踏み場もない程であった。電車通りへ溝を超えて出るとき思わず触れた死体は、焼けつくように熱かった。彼は周章あわてて道に飛び上った。彼は余燼よじんの熱い電車通りを歩いてやっと焼け落ちて幽霊のようになり立っている両国橋の袂たもとについた。そこに来て川端に倒れると半ば意識を失ったようになり、昏々として眠ってしまった。

要作がお峯の叔母になる大森のおひさの家に辿りついたのは二日の夕方であった。おひさの家ではおひさも夫の宗吉も無事で家も何ともなかった。真っ黒な顔が要作だとは一寸判らなかつた。要作はおひさの汲んでくれた水をもものも言わずに飲んだ。おひさは、お峯と浩二が要作と一緒にでないことが判ると、

「そうかも知れないと思っただけ」と言って泣き出した。

要作はその夜はおひさの所へ泊った。体を洗い怪我をした足を繃帯してはじめてゆっくり体を布団の上に伸ばすことが出来たのであるが、まだあの恐ろしい一日の激動は心に一杯になつていて、眠ろうとしてもよく眠れなかつた。とろとろとすると手足がぎくりと縮

まっつて飛び上がるように吃驚するのであった。一度などは本当に飛び起きて声をあげて蚊帳をかむったまま廊下へ駆け出した。お久夫婦はその物音に吃驚して蠟燭をともしてやっつて来た。気がついた要作が蚊帳をぬいで出てくるのを夫婦は蒼い顔をしてじつと見つめていた。二人は蚊帳の釣手の切れたのをつないで自分達の部屋へ戻って行ったが、それからひそひそ話す声がきこえた。

要作は寝汗で冷くなつた体を翌朝早く起した。

おひさに握飯を拵えてもらい金五円と靴を借りて、せめて死骸だけでも探そうと、要作は再び焼けた市内に戻つた。大川は新大橋で超えて川に近い電車通りを北へ歩いた。見渡す限りの焼野原となつても人通りは流石だった。道には人夫や焦げたあとのある浴衣をきた足袋裸足の女達や警官や、学生や、リュックサックを背負つた男や、自転車に乗つた男などがひっきりなしに往来した。タイヤのない焼けて赤くなつた自転車に乗って行く小僧もいる。小さい橋には焼け落ちないところでも必ずいくつかの死体があつて、見物人が立つていた。

やっとお午過ぎに本所の家の跡へ来た。すっかり灰になつて焼け落ちてしまつた街は、路の曲り具合などでやっつと想像しながら辿りついたのであつた。焼けて見通しがつくと住んでいた街が馬鹿に狭く感じられた。自分の家と思われるところへ入つて、灰をほつて見たが、畳一枚残らない有様では仕様がなかつた。風が吹いて来るとこの焼跡の埃をまるで嵐の砂漠のように吹き上げた。顔に怪我をした近所の綿屋の親父に逢つたので、お峯のこときをきいて見た。親父は知らないと言つた。

「しかし何ですすよ。火は三方から来ましたからねえ。ここから逃げるといったら向うだけ

でしたから」

と西を指した。それは大川の方、被服廠の方であった。親父は要作の顔を一寸のぞき込んでから付加えた。

「この辺りの連中もどうしましたかねえ。私達ばかりですよ。ここへやって来ましたのは」
要作は神田の印刷所も心配だったが、しかし足は自然とそこから被服廠へ向う道を辿っていた。被服廠まで来た時彼の足は入口の前で暫く釘付けになった。生死の境にいた数時間が胸に蘇って来たのであった。入口は沢山の人々の出入りでごった返していた。人夫達がその人々を掻き分けて死体を外へ搬んでいた。身許が判った人々かも知れない。要作は人々の間にはまって押されながら中へはいっていた。彼は何のためにここへ来たのかと人から訊ねられたら勿論お峯と子供を探しに来たと言っただろうが、彼の足を断末魔に掴んだ男のことが不思議と頭から離れなかった。あの薄暗がりでも顔も体も真黒だったので人相は知れなかったが、明るいと見たら恰好でそれと判りそうに思えた。死体の群をのぞき込んで見て行くうちに心臓が激しくなってきた。彼と押し合っている人々がいなかったなら恐怖を押える事が出来なかつただろう。彼の前に二人の男女が死体を調べながら歩いていった。二人は不図立止って荷物の焼け残りの針金の塊の様なものに眼をかけた。傍に一人の男の死体があった。その舌を長く出した死体の顔をのぞき込んだ二人は真っ蒼になった。持ち物の焼け残りに二人は見覚えがあったのだらう。しばらくして男の方は思い切って震える手を差し伸ばして歯を調べた。しかしまだ本当に彼等の探している人とは決しかねているように立上った。女は傍に屈んで手を出しかけたが急に引っ返めて、

「ね、ねえ。ほんとにお父様でしょうか」

震え声で女は立ち上ると男の後に退って、顔に袖を当てた。そして再び顔を上げると、涙を引っ込ませてゆがんだ顔付で男の背後からのぞいた。二人はいつまでも決しかねたように立っていた。要作はあの生き残った二、三百人が固まっていた隅にやってくる、自分が何のためか判らないとりつかれたような気持でいるのに気がついて、慌てて踵かかとを返した。中年の女が立上ってしきりにお題目を唱えている背後をぬけて、要作は広場の中の方へはいつて行った。水のはいつた桶を抱えた男がいた。男は女の死体を見るとその腹の上で焦げて真っ黒になっていいる帯を、桶の中の雑巾で洗って見るのであった。要作がしばらくその男のあとをついて行くと、やがて男は立止って桶を地上に置いて溜息をついた。そして要作と顔を合せた。

「帯に見覚えがあるので洗ってるんです」

と要作にいった。要作が頷くと、

「私の叔母なんですがね。知り合いが、叔母がここへ逃げて来たことを教えてくれたんです」

「そうですか。私は女房と子供なのです。：：さあ、いるものやらないものやら」

男はポケットから巻煙草を一本出し半分千切って要作に与えた。傍の焼け残りの箆筒を逆さにしてそれへ並んで腰をかけて火をつけた。

「私あ、朝からこうして帯を洗っては調べているんですが、五百も調べたでしょうか。もう厭いやになってしまいました」

男はこう言いながら、辺りの死体を平気な顔で見廻してうまそうに煙草をすった。この表情は要作にも感あ染つっていった。

「もうよしまししょう」と男は独り言のように言った。「見付かったにしても、もうこんな浅ましい姿になった叔母を見たくなくなりました」

男は尚も見廻しながら、

「全くむごたらしい死にざまですよ」

と落着いた声でいった。要作は見物人のような気持でいる今の自分が、まかり間違えばこの廻りの死体と同じようになっていたかも知れないということ思い出したにも関わらず、今こうして生きていることがさつきから如何にも当然のような気がして来て、前のように恐怖がどうしてもピンと来なくなつて来た。彼もこの男と同じようにもう死体に馴れてしまった。要作は自分が惨事の真只中にいたことを語った。相手の顔に始めて吃驚したような表情が現れた。要作は他人の話しのように手短かに語り、煙草をゆつくりと吸い終えてこの男と別れた。

要作はそれからしばらく死体の間を歩き廻っているうちに、今度は次第にお峯の四肢を踏ん張り舌を長くした実際の姿が浮んで来た。突然突き刺すような激しい悲しみに襲われた。大声を上げて泣き叫びたいような気持であつた。そして泣き叫んだぐらいではこの悲しみが拭われないことも判っていた。それからこれ等の無数の死体が一つ一つそれぞれ生きた人々からの堪え難い悲しみの糸でつながっているように思えてきた。恐怖や奇怪な感じはあとかたもなくなつて、搔き抱いて嘆き沈みたいような親しい気持であつた。暮れ方になつて廻り終えた。お峯や浩二と思われる死体は結局なかつた。やや安堵したのであつたが、悲しさに打たれたあとの虚脱したような空ろな気持は抜けなかつた。

要作はその夜は大森へ帰らなかつた。川端へさまよい出て、焼跡の煉瓦の中で野宿した。

要作は次の日も次の日も茫然として川の岸をのぞいて歩いた。近くで炊出しがあると、容れ物の代わりにそこらにある有り合わせの瓦などを手にとって、炊出しを受ける行列に加わった。そして一日中、川端を歩き、焼けた橋杭に流れよる死体などを何時までも眺めていた。

風聲鶴唳ふうせいかくれいの自警団も戒嚴令かいげんれいと共に次第に本当の秩序を回復し、東京は焼跡の掘立小屋と食い物の露店から騒然として復興し始めた。

要作は相変らず茫然としていた。

彼の寝ている焼跡の塀の向う側で声がした。

「おい。善公。善公じゃあないか」

「あ、旦那」

「生きていたのか。俺のどこじゃあ女房も娘も助かったが身一つですってんさ。みんな夢だ。今までのことを言っただけじゃはじまらない。潔くすいとんでもゆであづきでも始めようと思うんだ。どうだい手が要るんだが来ないか」

「行きましょう。是非行きます」

こんな話し声も要作には反応がなかった。彼は空洞な気持ちでこれを聞き、話し声はそのまま耳を空しく通り抜けた。

或る夜、真夜中頃、死んだような沈黙の中に、彼は川の真っ暗な中から一つの声を確かに聞いた。「ああ」といったようでもあった。「父さん」といったようでもあった。彼は闇の中をじっと見つめたがあとには何も聞えなかった。対岸から聞えたにしては余りに近すぎたが、辺りが余りに静かなので近く聞えたのだろうか。朝になって見ると勿論川の中は人

のいるようなところはなかった。要作は遠廻りをして向う岸へ行つて見た。河岸を見て行くと、彼は杭につかまされたまま焼け死んでいる死体を見付けた。ぼんやりした頭でじつとこれを見つめていると、この死体が幻のように口をきいて何か話かけるのであった。傍には朝早くから、二人の男が河から何か引揚げるとか綱を引っ張っていた。

「おい」と要作は慌てて二人に向つて叫んだ。「あれは未だ生きてゐるぞ。おいおい」

死骸はこの時、川の波に浮かされて静かに横になった。二人は吃驚して死体と要作の顔とを見比べた。ただよっている死骸は全くの死骸に違いなかった。要作は馬鹿げたことを口走つたのにすぐ気がついた。彼は頭の中に鈍い痛みを感じて不機嫌な顔付でくるりと後をむくと二人の返事を待たずそこを歩き出した。二人の男は顔を見合わせた。一人の男は、「勝が昨日言つてたなあ、あれじゃあねえか。これだぜ」

と額に指をさした。去つて行く要作の耳にはこの声がよくはいつた。二人の男が彼をどう思つたのかということも、それでいて自分が尚更そう思われるような素振りをしたこともよく判つていた。足が今勝手に動いていると同じように、心も捕え得ない意識の外を勝手に歩き廻っているようであつた。

復興の露店街では米が出廻つて来ると「すいとん」や「ゆであづき」に代つて「牛めし」とか「ライスカレー」の店が出て来た。市役所の職業案内所の前には弁当付一日三円の日当にありつこうとして人々が未明から延々として列をなした。橋や川の中にある死体は少しづつだんだん片付けられ、仮橋をかけるために裸で川の中へ入っている工兵達の勇ましい姿は感謝の眼をもつて見られた。読経と共に死体の片付けもやっている僧侶の一団もあつた。被服廠の跡にある身許もなにも判らなくなつてしまつた、四万の死体はやがて一ま

とめにして改めて焼かれた。数日間絶えなかったその煙のあとに、人骨ばかりの土饅頭のような小さな円い丘が出来た。人々の拜みに来るのと僧侶の読経が終日続いた。骨の丘の後のトタン小屋の傍には「お骨は御えんりよなくお持ち下さい。両國回向院」という札が立っていた。

要作はまだ川端や被服廠のあたりを彷徨していた。時々気がついたように配給の列に入って飯をもらった。腹がすいて道傍に寝ていると通りがかりの男が背中のリュックサックから握り飯をくれたこともあった。朝から雨が降り続けている日もあった。要作は一枚のトタン板の下に入って、一日中身動きもせず、雨の音を聞きながら寝ていた。彼の服はだんだんボロボロになって行った。こういう時でなかったら乞食か気違いとしてほんとうに目立っただろう。実際に、

「気違いじゃあないか」

と口に出して言った男女もいた。他人ばかりでなく、自分自身でさえも、俺はもう気が違ってしまっているのではないかと思ったりした。

ある夕方近く、要作は川端に新らしく出来た屋台店の傍を通りかかった。中から二、三人の元気な話声が聞えて酒の香がただよって来た。要作はふと懐中していた金をまだ一文も使わないでいたことに気がついた。彼は急に誘われるように暖簾のれんを分けて入った。主の親父は要作の姿を見ると警戒するように眼を光らせた。客の人夫らしい二人の男も話を止めた。要作は客の茶碗を見ながら、

「一杯頼む」

と低い声でいった。親父は思い切った顔付きで一本つけて、やがてそれを湯呑について

出した。要作はそれを一息に飲み干した。久し振りに飲む酒は喉や胃腑をひどく気持よく刺激して、腸から尻の穴までもしみ渡るかと思われるほどこたえた。眼をつむって息をつくくと、湯呑をまた持ち上げて空になったのを眺めた。

「もう一杯頼む」

親父はきこえない振りをして眼の前の板の上を雑巾でふいていた。

「心配しなくてもいいよ。僕は気違いじゃあないし、金だつてあるよ」

要作は非常に努力してこれだけいうと懐中から五円札を出して見せた。二人の客はじろじろと要作の姿を眺めた。親父は吃驚したように顔を上げて慌てて手を振ると安心したように酒をつけた。屋台の中は爛徳利が二本と大部分空になった一升瓶が五六本と鰯ずるめがぶら下がっている以外には何もなかった。要作はまた一息に飲んだ。

「こんな恰好だが、こんな時のことだ。お互い様だ」

「いやさようですとも」

要作は、俺は確かに人と話をしているぞと思った。そしてまた、かつての俺はこうして生きているんだ。今でも人並の理屈で話をし、昔とは少しも変わっていないんだと思った。要作が眼の前の鰯の足を無遠慮にむしったのは、反って親父を安心させた。彼はこれをかみながら空の湯呑を出した。だんだん口がほぐれてきて話をはじめ出すと、親父はいった。「私あ向島で店を開いてましたが、どしやんで一遍に行っちゃいました。こたえましましたねえ。……永年苦勞して築いたんですからね。しかし、なあに、元も子もなくなつて見りやあ、それほどの未練もない」

「家族はどうしたい」

「家族ですか。嬬あも子供も、お袋も、みんな行っちゃいました。ハッハッ」
親父は事もなげに笑い飛ばした。要作は親父の笑う顔をじっと見ながら再び茶碗を出した。

暗くなると親父は屋台を畳んで帰り仕度を始めた。要作は何杯飲んだか知らないが五円出して僅かな釣りをもらうと、川端を歩いて行った。酔っているのか正気であるのか判らなかつた。しかし体の芯が怒った時のようにカーツとしていた。要作は淋しい焼跡の崖に来て川に面して腰を下した。暗くなると辺りを歩く人間はなかつた。大川には青ざめた西の空の光が落ちて光っていた。西岸近くには材木や色々な流れよつたものが黒く浮いていた。その向うにある燃えさしの杭には蜘蛛の糸のように縄が四方からしばつてあつた。その沢山の縄の先にくくられて浮いているのは、夜目にも判るように膝や尻や腕などを思い思いに水から出している死体であつた。こうして死体の流れ去るのを防いでいるのであつた。水道の破れなのか、何処かで水の逆り出る音が幽かにしていた。

まるで山奥にたった一人でいるようだった。要作はじつと水面を眺めていた。彼は悲しくなつて来た。こうして独りぼちでいる自分よりは、水の中にああして一緒になつていく死体たちの方がどんなに淋しくなくていいだろう。彼は死体たちにおいてけぼりを食わされたような気持になつた。また彼は何時かのように死体をかき抱きたいような気持が起つて来た。浩二やお峯。どうしただろう。これが病気でもって自分の腕の中で死んでくれたなら、ゆっくり別れを告げることも出来たろうに。あとのことについての願ひもきいてやる事が出来、安心して死んで行けたらうに。俺の居ないところでどんなに苦しみ、何んなに俺のことを探して、俺の手を求めて死んだことだろう。彼は胸をしめつけられるよ

うな発作に襲われた。喉から奇妙な声が押し出されるようにふるえて出てくると、たちまち爆発するように泣き出した。痩せた胸の、酒に燃えた心臓で喘ぎながら、幾日もの永い間抑え沈んでいた悲しみが一度に噴き出して、まるで人の声とは思えないような声を上げて激しく泣き続けた。

要作が翌日眼をさました時は、陽はもうずっと高く上がっていた。前の晩永い間泣いた挙句に何処かへさまよい歩いたようであった。彼は殆ど見覚えなるところに寝ていた。大きい広場で彼の頭の上には焼けた大きな木が幹だけを黒く天に突き出していた。秋の空は蒼く気持よく晴れ渡って、澄んだ空気の中に明るい陽の光が一杯張って彼の周囲にこぼれていた。彼は思い掛けないような爽々^{すがすが}しさを覚えて驚いて起き上った。あれ以来こんな朝を迎えたことは一度だつてなかった。彼は思わず空気を胸に吸い込んで、手を広げた。澄んだ空気の中にこぼれている陽の光を手で掬いたいような気持であった。永い幾日もの間の眠りから本当に覚めたようであった。この数日のことを考えると彼には全然判らなかつた。まるで陽の眼の届かない暗い谷底を歩いていたようであった。

要作のいるところは他の所と同じような焼跡に違いなかつたが、見廻した彼の眼が思わず釘付けにされたものがあつた。それは土堤^{つみ}のように小高くなつた地面の黒い焼けた塵の中に、一坪ばかりの広さで水々しい青い色をした草の芽が一寸ばかりの高さで、手入れの届いた芝生のように生え揃つて出ているところであつた。彼は吃驚してしばらくの間これを眺めていた。無意識のうちに立ち上つてそこへ行くと、身を投げ出してこの草の上に横になつた。焦げ臭いにおいの中に確かに草の匂いがした。草の上に頬をつけていると彼の

眼からは静かな涙が流れた。なごやかな、音もなく石をぬらす春の雨のような涙であった。そして草の中からは、「万歳！万歳！」という声が湧き上がって来た。

【日本小説代表作全集（小山書店）第八卷 昭和十六年】

25頁 安田邸：…隅田川と被服廠の間にあつた。元禄年間に隅田川の水を引いた汐入回遊

式庭園として整備され、備前岡山藩主池田侯、安田善次郎氏の所有を経て、大正11年東京市へ寄付された。現在旧安田庭園として公開されている。

【庭園の木はすべて焼け焦げ、根こそぎにされたり、折れたり、ねじ切れたりしたものが多かった。倒れず残った木の幹や梢にはトタン板や衣服の切れ端が執拗に巻き付き、枝には自転車が引っかかっていた。】

（寺田寅彦『震災予防調査会報告』第100号1925）

27頁 翻轉：…ひるがえる様子

36頁 風聲鶴唳：…風の音や鶴の鳴声にも敵が寄せて来たかと恐れるほど、ちょっとした事におじけづくこと。

36頁 自警団 ……地域住民による治安維持のための組織。関東大震災の際は在郷軍人や消防団が中心となった。朝鮮人による暴動や井戸に毒薬を投下していらるとの流言飛語が国の機関や新聞によってさらに広まり、朝鮮人、中国人、社会主義活動家に対する虐殺・弾圧が起った。

：：：非常事態に際して、行政権や裁判権を軍隊にゆだね、兵力によって地域を警備することの布告命令。関東大震災の時は自然災害であったが9月2日に発令された。近衛・第一師団は9月1日から備蓄食糧の配給を行い、救護班による被災者の医療に当たった。軍隊に対する人々の好感が高まり、戒厳体制の治安回復力を実感した人々は軍隊組織の持つ力に畏敬を持ち、感謝の念をも抱いたと言われる。

：被服廠跡での遺体は38,015体（本所相生警察署調べ）。ここを臨時の火葬場とし露天で火葬した。周辺の遺体も含め49,821体が茶毘にふされ、3メートル以上の白骨の山が築かれた。

この地震で避難先として多くの人々が向かったのは、上野公園（50万人）、宮城前広場（30万人）を始め浅草公園、芝公園、靖国神社に5万人以上が集まり、各駅舎・寺院・学校・大邸宅へも大勢逃れた。中でも被服廠跡の被害が大きかった原因として、次の事が指摘されている。

- ・ 東京市の台地部は揺れが小さく、低地で人口が密集している下町で揺れが大きかった。
- ・ 東京市内178カ所から出火、58の大火となった。火災が同時発生した地域では消火活動が出来なかった。特に本所付近では北、東、の三方から火がせまった。
- ・ 9月1日～2日に台風が日本海を通過し、関東ではフェーン現象が

発生し方向を変えながら強風が吹いた。発生した火災旋風は111個記
録されている。

・持ち出した家財道具や大八車で道路がふさがれ、それに火が付き災
害が拡大した。

※関東大震災関連注釈の参考資料

『関東大震災を歩く』 武村雅之著 吉川弘文館

『歴史文化ライブラリー361号 災害復興の日本史』 安田正彦著 吉川弘文館

47頁

『水々しい青い色をした草の芽が一寸ばかりの高さで』

大災害の後で雑草の緑を見て力づけられた記録は多い。その一例として、
【三、四日たつと、焼けた芝生はもう青くなり、しゅろ竹や蘇鉄が芽
を吹き、銀杏も細い若葉を吹き出した。藤や桜は返り花をつけて、九
月の末に春が帰って来た。焦土の中に萌えいずる緑はうれしかった。
崩れ落ちた工場の廃墟に咲き出た、名も知らぬ雑草の花を見たときは
思わず涙が出た。】

『柿の種』寺田寅彦著 岩波文庫 短章その一より 68頁)